

## 団長の独り言

8月17日(日)「舞台転換の重要性」

今週から、舞台転換も本番通りとした  
通し稽古を行っている。

今回は、2名の舞台スタッフが専属で付  
く事になっているのだが、今回も役者が  
場面に応じ、芝居に集中しつつも、場面  
転換では気持ち切り替え、転換スタッ  
フとなり作業も行っている。

この場面転換の時というのは、真っ暗な舞  
台上で音も立てず、素早くて確に作業  
を行わねばならないので、慣れていないと  
本当に焦ってしまう。

だからこそ稽古場では、「誰が」「何を」  
「どうするか？」を綿密に打ち合わせて、  
何度も何度も繰り返し、確実に転換が  
出来るように稽古する。この「誰が」「何  
を」が少しでも狂うと、ないはずの物が  
その場に残ってしまったり、あるはずの物  
が出ていなかったりという事が起こる。

そうなる、いくら役者が名演技をして  
も芝居はぶち壊れてしまうので、稽古  
時間をかなり割り、納得するまで転換  
稽古を繰り返し、「よし！これで大丈夫」  
と思っていざ劇場へ向かうのだ。

ここで初めて舞台セットを使っている転換を  
行うのだが、あれだけ稽古場でやっても、  
稽古場と劇場との感覚のあまりの違いに、  
最初はなかなかスムーズにはいかないもの。

その「舞台の怖さ」をよく知っている舞台  
監督の高橋さんが今回の稽古から参加  
してくれるので、我々が「完璧」と思い込  
んでいる稽古場での転換でも、恐らく不  
備を指摘してくれるはずだ。

劇団ふぁんハウスは今回で47回目の公  
演となるのだが、残念ながら「転換ミス」  
の経験はある。

その中で、凄まじく印象に残っている「転  
換ミス」といえば、2005年に上演した、  
第10回公演「新・カーテンコール」とい  
う舞台だろうなあ。

この作品の舞台セットを考案したのは、  
当時、イギリスの大学で舞台美術を学ん  
でいた日本人の学生さんで、我々の作品  
が彼女にとって、舞台美術家としての  
デビュー作品であった。

だから彼女は相当気合が入っていたし、  
やる気に満ち溢れていたのだが、からく  
り仕掛けのある複雑な造りで、おまけ  
に道具を造った人も、専門家ではない大  
工仕事得意な素人さん。  
「大丈夫かな？」と思いつつも劇場入り。

立ち上がった実際の舞台セットを観ても、  
なんとなく不安定な気がするが、「場当  
たり」で、からくり仕掛けを動かしての  
転換を行えば、運よくか運悪くか？

一発で上手くいったので、どこかで油断  
をしてしまい、いざ本番を迎えてた。  
すると、「居酒屋」から「事務所」に転換  
する際、事故は起きてしまった。

大きなパネルの上半分を下に降ろすと、  
そこにカウンターが出て来て、パネルの上  
半分の開いた後ろには、お品書きが貼っ  
てある別のパネルがあるという「居酒屋」。

その「居酒屋」を事務所に変身させるに  
は、下に降りているパネルを、カウンター  
ごと「よいしょー」と持ち上げ、上のほう  
にある金具で固定してパネルを閉じると、

「事務所の壁」の出来上がり！と……なる  
予定だったのが、持ち上げたカウンター  
の重さにパネルが耐えきれず、本番中、  
セットにゆがみが生じ、固定金具の位置  
がズレてしまい、パネルを固定する事も

出来ず、暗転の短時間では、どうする事  
も出来ないまま、明かりが入ってしまった。  
当然、明かりが入れば芝居は始まる。

その結果、舞台前はデスク、事務椅子、  
ホワイトボードが並んだ「事務所」なのに、  
後ろのパネルは居酒屋のままという状態。

幸い？役者達は、前(客席)を向いて芝  
居を行っていたので、後ろが居酒屋のま  
まってことは全く気が付かず、動揺しな  
いで「事務所」の芝居を行っていたため、  
何事もなく進行していたのが、お客様か  
らしてみたら、事務所のシーンのはずな  
のに、後ろは居酒屋？という状態で  
御覧になっていたのだ。

「なんとかしなきゃー」と思い、「事務所  
にある居酒屋カウンター」を正当化する  
ため、本来、私演じる「社長」が「木枯し  
紋次郎」のテーマを歌いながら、舞台袖  
から登場する予定だったのを、カウンタ

ーの下に潜り込み、そこで歌を歌い始め、  
登場と共にカウンターの上に飛び乗って、  
そこをステージに見立てて、「どこかでだ  
れかがあ〜♪」を大袈裟に踊り、そして  
朗々と歌うという芝居に変更した。

お客様には、「カウンターがステージにな  
るから、居酒屋だけど事務所なのね」と、  
無理やり納得していただいた。

その後、ちよ〜と休憩となったので、応急  
処置を施しセットの転換をなくして、事  
なき？を得たのだが、舞台転換というも  
のを甘く見ると大変な事になるというを  
再確認した。

今日の稽古でも、昼間は衣裳を身に着  
けての「通し稽古」を行い、(もちろん！  
転換もあります)夜の稽古では、ダメを  
出した役者の抜き稽古もそこそこに、  
「転換」をメインにしての抜き稽古を徹  
底的に行った。

因みに、その大ミスをした公演の次から  
は、プロの専門家にデザインをお願いし、  
プロの専門家に道具を創っていただけ  
ようにしたので、それ以来、道具が絡む  
転換ミスというのは皆無となっている。

これは後日談だけど、そのイギリスの学  
生さんから、公演終了後、もらったメー  
ルにはこう書かれていた。

「私が部屋で作っていたのは、【舞台セット  
の模型】ではなく、【模型の舞台セット】  
だったという事に気づかされました……と。  
彼女もす〜く勉強になったと思う。  
今、どうしているのかなあ？